

「あちら側」と「こちら側」

PTA会長 市村ラリー

私は「二者択一」が実は好きではありません。何事についても二つしか選択肢がないと比較の原理が働きすぎて、その二つを主観的に不平等に判断してしまいがちだからです。

アメリカ生活が長いボストン日本語学校の生徒たちは、英語は慣れ親しんだこちら側の言葉で、自分が苦勞している日本語は親が使うあちら側の言葉という気持ちを持っているのではないのでしょうか。親みたいに日本語をうまく使いこなせることは絶対にないのだと。

親にとってみれば日本語は自分が生まれてからずっと使っている言葉。身近すぎる言葉だからこそ、わかって当たり前。なのに自分の子供はなぜできないのか、時には子供にきつく当たってしまう。これがもし親自身が知らない言葉、例えばヒンディー語だったら、たどたどしく話す子供を手放しにほめるでしょう。私がぜんぜんわからない言葉をこんなに話せるなんてすごい、すごい、と。

私が昔、アルゼンチンのブエノスアイレスにある日本語とスペイン語のバイリンガル小学校で日本語を教えていたときの事です。日本語がおぼつかない日系3-4世の7年生の生徒たちの英語の授業が始まりました。するといつもは日本語は難しいからいやだと嘆いていた生徒たちが、「日本語は簡単、英語はもっと大変、日本語のほうが好き」と言い始めました。それまではスペイン語はこちら側の自分の身近な言語、日本語はあちら側の遠くはなれた言語だったのが英語が加わったことより、より理解できる日本語の立ち位置が変わり、もっと身近なものに感じられるようになったのではないかと考えます。三つの関係がなせる不思議な業です。

私たちの子供たちは実は日本語がすごくわかるし、話せるのです。ただそれに本人が気がついていないだけなのです。そして親もそのことを認めることがへたなのです。私たち自身が子供の時、毎日毎日漢字を練習し、熟語を覚え、苦勞して手に入れたはずの日本語なのにそのことを忘れてしまっているのかも知れません。子供たちが感じる日本語と英語の距離感を親自身が助長させることがないよう、子供たちを励まして、励まして、励まして、日本語をなるべく「こちら側」に引き込めるよう見守って行きたいものです。

